

Title	文庫開設六十年記念フォーラム：「書誌学のこれまでとこれから」開催記
Sub Title	Proceedings of the forum commemorating the 60th anniversary of Keio Institute of Oriental Classics : the history and future of bibliography
Author	一戸, 渉(Ichinohe, Wataru)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2020
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.55 (2020.) ,p.23- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20200000-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文庫開設六十年記念フォーラム

「書誌学のこれまでとこれから」開催記

斯道文庫が例年開催している斯道文庫講演会は、書誌学に限らず、ひろく古典籍に関する研究を行っている第一線の研究者をお招きし、その研究成果を伺おうという趣旨で、一九八七年より行われている恒例行事であり、本年（二〇二〇）で第三十三回目となる。

折しも本年は斯道文庫が慶應義塾に設置されてより六十周年の節目を迎えるということで、この斯道文庫講演会をその記念行事と位置づけ、例年とはやや趣向を変えて「書誌学のこれまでとこれから」という全体のテーマを掲げ、講演会に加えて文庫員の研究報告会を組み込んだ拡大形式で挙行することが文庫内の議論において決定され、前年度より準備を進めていた。

ところが今般のSARS-CoV-2を病原とする新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的蔓延に伴い、例年のように塾内施設を使用した対面での開催が困難となったことから、急遽オンラインでの開催に切り替えることとなった。本年は通常とは異なる形での開催となったこともあり、文書の形でも記録を残す必要があるとのことと本年十一月二十八日（土）の当日のイベントの概要について以下記してゆく。

当日はまず佐々木孝浩文庫長より本イベントの趣旨説明がなされた。斯道文庫の概要と沿革、また十年前の斯道文庫開設五十年記念事業から現在までに至る研究の歩みについて紹介があり、近年における各種データベースの公開やFutureLearnでの

オンラインでの学習コンテンツの配信、センチュリー文化財団
寄託品展覧会などの展示活動、次年度に開館予定の慶應義塾
ミュージアムモモンズとの連携など、種々の交流活動や対外的
な情報発信、あるいはデジタル化の波の中で書誌学の貢献の
あり方に関する展望が語られた。その上で、本日の基調講演を
お願いした佐藤道生氏に関する講師紹介がなされた。佐藤氏は
一九五五年東京生まれであり、慶應義塾大学及び同大学院にお
いて学ばれ、一九八九年から二〇二〇年三月まで慶應義塾に奉
職されたこと、また二〇一四年十月から二〇一八年九月までは
斯道文庫長を務められたことなどの紹介がなされた。

続いて佐藤道生氏による基調講演「資料発掘と斯道文庫」が
あった。その内容については佐藤氏ご自身がこの『斯道文庫論
集』第五十五輯に寄稿されている講演録をお読みいただきたい。
基調講演ののち、文庫員による研究報告が行われた。その内容
を示すべく、以下、各人が作成した要旨を発表順に掲げる。

堀川貴司「斯道文庫所蔵文人筆跡類について」

斯道文庫の蔵書は個別に購入・寄贈されて順次増加している
一般蔵書と、まとまった単位で収蔵される特殊文庫に分かれて

いる。特殊文庫の多くは江戸時代および近代の学者の旧蔵書で、
詩歌文章を記したものと書簡類が含まれている。一般蔵書にお
いても、それまでの収集対象に関わる同様のものを収集してい
る。しかし、書籍に比べて内容が断片的で、資料としての扱い
が難しいため、整理・研究とも敬遠されがちであった。そこで、
所蔵資料の現状を把握し、未整理資料の整理および内容の紹介
を進め、多角的な利用へと道を付けた。

現在の所蔵品の概要は、

【一般蔵書】四一点……松崎謙堂・安井息軒の書簡などが主。

【浜野文庫】約六六〇点……『慶應義塾大学附属研究所斯道文
庫 浜野文庫目録』（汲古書院、二〇一一年）に載せず。菅茶山・
北条霞亭関係書簡が充実している。

【椎本文庫】五点……橘守部の和歌詠草など。

【戸原文庫】一四一点……秋月藩医戸原家ゆかりの漢詩・書簡等。

【亀井家学文庫】約五〇点（未整理）……亀井南冥・昭陽父子
および一家の書簡・詠草等。

【今関文庫】掛軸三二点、書簡等不明（一〇〇〇点以上か）
……今関天彭の旧蔵品。

【横山・松本文庫】書簡類約二〇点、メモ類多数……横山重・

松本隆信旧蔵研究資料。

【センチユリー文化財団寄託資料】墨蹟六七点、書状二八八点、懐紙三二八点、短冊四一七点、その他書跡二二五点……僧侶・公家・歌人・俳人等も含む。これ以外に画賛などがある。

といったところで、未整理のもの、研究の俎上に上っていないものも多い。今年度のセンチユリー文化財団寄託品展覧会「文人の書」では、センチユリー寄託品を中心にしながらも、一般蔵書・特殊文庫のものも出品し、今後の研究につなげようと考えた。

その一例として、祇園南海の七言古詩（今関文庫蔵）を取り上げた。

これは「贈筑州源太守白石」すなわち新井白石に贈ると題する詩で、正徳五年（一七一五）秋の作で、翌年二月に行われた白石六〇歳を祝う宴に寄せたものである。

同様の作品を集めたのが『天爵堂寿言』という書物で、『新井白石全集』六（国書刊行会、一九〇七年）に収められている。ここにも当該作品は含まれる。

さらに、没後門人らによって編集された『南海先生文集』（天明四年（一七八七）刊）巻一・七言古に「新井使君、六十華誕、

恭製二律以具祝寿、且裁此篇奉贈、併述鄙衷」と題して収載された。

この三者の本文を比較すると、異同箇所が多数見つかる。『天爵堂寿言』『南海先生文集』それぞれの独自異文が多く、本人の推敲のみならず、編集者・校訂者による改変もあったことがうかがわれる。そのなかから、「文章が公誠余事、願為蒼生完瘡痍」の「完」が『文集』では肉になっていることについて、『文集』の自注を援用して、版本作成時の誤刻ではないかと推測した。

また、自筆作品末尾の落款印「一片氷心在玉壺」に、江戸を離れた南海の心情が窺われることも付け加えた。

このように、自筆の筆跡類は、作品研究・作家研究に新たな光を当てる重要な資料となり得ることを述べた。

高橋悠介「密教聖教の略字表記と東密西院流一僧名表記を中心に」

本報告では、密教聖教の書名や撰者、奥書を考える際にも関わってくる略字の問題を取り上げた。仏教書にみられる特徴的な略字は「抄物書」「省文」等と称され、速記のためという面が強調されがちだが、密教聖教の略字には、また別な背景があ

る。篇や旁のみで漢字を表現する略字にしても、仏教用語、寺院名、僧名など、語の性格によって機能は変わってくるが、一つには聖教が伝授された環境や、情報の秘密性と関わる略字の機能が挙げられる。蘇生法を「草禾魚一水」と表記する、称名寺・銀阿の鎌倉後期写本の例などは、あえて難しく表記しているのが明確である。一方、僧名の略字表記に関しては、名前をそのまま写すことを憚るといった性格が強い。

篇や旁による人名略字は、安居院の澄憲を「登心」と表記する承久四年（一二三二）写「上素帖」（称名寺聖教・湛睿手沢本）の例など、密教聖教に限定されず、古記録にも「人車記」（兵範記、平信範記）や「水左記」などの例があるが、密教聖教にはとりわけ顕著である。僧名略字を特に発達させたのは、東密広沢流のうちの西院流で、宏教（禪遍、一一八四―一二五五）の編と考えられる「先徳略名（ム）」（別書名「作名」）は、五十名近くの僧名略字を挙げる。この中には、高野山の心覚を「予見」と称するような、僧の住房等の属性や名前の中から、篇や旁の一部を切り出した略名が多くみられる。松本光隆氏が「先徳略名口決・作名について」（『鎌倉時代語研究』六、一九八三年五月）で指摘するように、これらの略名は、「西院八結」「金

玉」「異水」等の西院流の伝授聖教中に確認できる。

この「先徳略名（ム）」を増補して成立したのが「先徳略名口決」で、群書類従本のように相当多くの略名を増補したものもあるが、「群書解題」では、宏教を先師と呼ぶ記事に基づき、根幹部分は宏教の弟子の能禪が編集したと推測し、「聴講等に於ける一種の速記法」としている。

しかし、普通寺藏・寛保二年四月写本は、「ム」を宏教の略名として示す項で、「ム」に「元瑜」と朱注を入れ、普通寺藏・明和八年七月写本でも、同じ項の「先師権律師宏教」の前に「元瑜之」と朱書している。これらは近世写本の例とはいえ、西院流聖教において「ム」が宏教の「宏」の略字であったところに、元瑜が編集した段階で元瑜Ⅱ「私」の略体としての「ム」が加わった経緯を示しているようにみえる。元瑜（西院流元瑜方の祖、一二二八―一三一九）は、安達泰盛ゆかりの鎌倉の甘縄無量寿院で、宏教から伝法灌頂を受けた僧である。

僧名略字は、鎌倉時代に西院流で初めて成立した訳ではなく、その前提としては、聖教を転写する際に、本奥書中の僧名を篇や旁のみで示す例に注目したい。これは「僧名の二字目を―に置き換え、場合によっては当該字を傍記する」といった一般的

な方法と比べると、用例は少ないものの、天台・真言共に確認でき、少なくとも平安後期にまで遡る。二字目をーに置き換え当該字の篇のみ傍記する融合的な例もある。いずれも先徳の名をそのまま記すことに対する憚りが目的で、速記とは関係がない。西院流の伝授書は、この欠筆とも異なる、聖教の本奥書における僧名表記を、顯著に応用・深化させたのではないだろうか。白河院が夢で「竹人攘災」と告げられた際、大江匡房が「竹人は範俊の意」と解釈したという「元亨釈書」巻第十・範俊伝等の説話も、速記とは異なる僧名略字の機能を示唆する。さらに、西院流の伝授書だけに限らず、真言宗の聖教での略字表記には、祖師・空海の真作と信じられていた『御遺告二十五箇条』（実際は十世紀末までに成立）にみえる「六一山精進嶺土心水師之竹木目底」（「室生山精進嶺堅恵法師之箱底」と解釈される）等の記事も、大きな影響を与えたと想定されよう。

矢島明希子「斯道文庫所蔵影宋本爾雅について」

現在、斯道文庫では三本の松崎懺堂校訂影宋本爾雅を蔵している。これらはすでに目録や解題が作成されているが、今回「書誌学のこれまでとこれから」と題したフォーラムが開催される

に当たり、改めてこれらの三本について検討したい。

松崎懺堂（一七七一—一八四四）は、朱子学を奉じ掛川藩に仕えたが、致仕後は狩谷校斎等と深く交流し、考証学へ傾倒していった。特に、『爾雅』の校訂を非常に熱心に行っていたことが『懺堂日曆』からうかがえる。このような懺堂晩年の学問の成果が、縮刻唐開成石経と影宋本爾雅の刊行であった。

影宋本の末尾に附された自跋によると、懺堂は、南宋高宗の闕筆が補刻張にのみ見えることを根拠に、その底本を「北宋仁宗時刻版、南宋高宗時補刊」と鑑定している。しかし、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『創立二十周年記念・浜野文庫并近蒐本展観書目録』（編者、一九八〇）の解題が指摘するように、中国国家図書館所蔵の原刻本を影印本によってこれを確認すると、原刻の時点ですでに高宗の闕筆が見られるため、南宋高宗期刊南宋前期補刻本と修正されるべきであろう。

また、懺堂が底本としたのは、校斎が京都の崇蘭館蔵本を借りて精写したもので、原本である崇蘭館本は現在所在不明である。校斎は文政四年には崇蘭館を訪問しているが、いつのこの本が摸抄されたのかは定かでない。懺堂は、この摸抄本を目睹してすぐに刊行せんと願ったが、校訂するのに適当な対校本が

見つからず、刊行を見送っていた。そこへ、再び掖斎から大字本爾雅がもたらされる。これは京都の高階氏所蔵の覆宋五山版で、『日曆』によると天保四年五月八日に掖斎からその模抄本を借りている。そしてそれは掛川藩医の山本頤庵の本だという。謙堂は、この大字本と元明の諸本によって影宋本を校訂し、「校譌」を作成して末尾に附した。

斯道文庫所蔵本のうち、まず浜野文庫の「有仁館蔵書印」という蔵書印を有する本をAとし、謙堂の蔵書印を有する本をBとする。AとBは同版であるが、Bには「校譌」がなく、Aは校訂をした文字に傍点を加えるのに対し、Bには傍線を加えた文字があり、傍点はない。また、Aの「校譌」を参照してAとBの異同を対照すると、Bは謙堂が校訂を加える以前のテキストを留めており、AはBに校訂を加え、修訂した本であるといえる。また、底本となった南宋刊本の原刻である中国国家図書館本と比較すると、Aの方が原刻に近いテキストに修訂されていることが分かる。

そして、三本目の森立之・約之父子書入本をCとする。CはAとまったく同版で、森立之による朱筆の校注が書入れられている。この校注は、立之が大字本と校合したものであり、約之

の書入の中には、大字本について山本頤庵の他にも曲直瀬家がその模抄本を蔵していたことが記されている。この書人からは、掖斎がもたらした善本が関係の深い医家で模抄され、伝わっていたことがうかがえる。この他にも、約之の家には謙堂自筆校注書入本があると記されており、この本が発見されれば謙堂の校訂に関する極めて重要な資料となりうる。

これら三本の影宋本は、すでにそれぞれ目録や解題として調査・研究の成果が発表されているが、AとBとの関係や、森氏書人からうかがえる大字本の広がりについては、さらに検討の余地があると考えている。今後の課題として調査を継続していきたい。

住吉朋彦・種村和史・斎藤慎一郎「慶應義塾図書館蔵『論語疏』卷六の文献価値」

この報告では、二〇一七年に慶應義塾図書館が収蔵し、二〇二〇年に公開した『論語疏』古鈔本の意義について、斎藤慎一郎、種村和史、阿氏と住吉朋彦の三名が、研究成果の一端を述べた。当該鈔本の内容は、梁の皇侃の『論語義疏』巻五に相当するが、書写と伝来の様相から推して、特別の意義を含むことは、

当初から明かであったため、慶應義塾大学では、研究領域を横断する形で論語疏研究会を組織し、二〇一八年以来、その基礎研究に当たってきた。今回の報告者の三名は、いずれも同研究会のメンバーである。

まず書誌学の観点からこの鈔本を研究した住吉が、鈔本取得の経緯と、その概要について、以下の報告を行った。

当該の鈔本は二十張からなる卷子本であり、『論語』子罕、郷党兩篇の経注疏文を、ほぼ完存する。但し、平安時代の藤原氏所鈔と見られる「藤」の縫印、不明の草名、さらなる古印の存在から、それ以前の書写と見られるものの、書写の年時や場所を知らせる直接の徴証はない。

そこで、書写の様態に注目して分析を加えた結果、日本や新羅、唐代の鈔本とは近似しないが、敦煌出土資料との比較から、楷書成立以前の北朝の仏経論疏写本に近似すること、また料紙の観察から、簾文の粗い麻紙を用いることが指摘され、概そ六世紀後半頃の〔南北朝末隋〕写本との結論が導かれた。

また文献学の観点から、その本文には、皇侃の著作に共通し、経注疏文を全載する古態が見られ、いわゆる単疏本に対立すること、しかしそれ以上の理解のためには、現存他本との校勘が

必要であることを指摘した。

これに続いて種村和史氏が、「慶應義塾図書館蔵『論語疏』巻六 校勘作業を通して気付いたこと」と題し、当初の校勘に基づく見解を、以下のように報告した。

慶應義塾図書館蔵『論語疏』巻六には、学術的な価値の高さを窺わせる特徴と、書写者の未熟さを疑わせる特徴とが混在している。これは、ある時代、ある地域の儒学の伝授の様相、恐らくはその裾野の部分の様相を生々しく感じ取るためのまたとない材料を提供するものではないかと考えられ、そこにこの本の類例の少ない価値を見出だすことができる。

当該本は他本との文字の異同が多いが、その中には、

- ① 經文からの引用として合理的である
 - ② 『論語注疏』他の文献に引用された『義疏』の文と一致する
 - ③ 後漢・鄭玄の経説と合致する
 - ④ 文脈的に合理性を有する
- など、『論語義疏』の原形を推測する上で有益と思われる例が数多い。

反面、この本には誤字脱字と思われるものが頻出し、その中

には、

① 一字を二字と誤認して分解して書いている

② 二字を一字に合體させて書いている

③ 文字の書き方自體を間違えているのではないかと思われるなど、かなり初歩的な間違いと思われる例を含む。この本の書写者は儒学に熟達した学者とは考えにくい。しかし、だとすると『論語義疏』のような専門性の高い文献をいかなる人がいかなる動機、いかなる状況で書写したのがこの本なのか、これは『論語義疏』の受容のされ方に関わる問題を提起するものである。

現象としてはきわめて興味深いものと思われるが、現段階ではどのように取り扱うべきかわからない特徴もある。

この本には異体字が非常に多く出現する。また、通行本では「變」とし、文脈上もそちらが通りがよいのを、この本では多く「反」と書かれている。さらに、この本の書字には、楷書的な筆法と異なる運筆が目につく。これらは、この本の書写年代や地域を考える材料となる可能性があるが、ただしそのためには、専門的な知見が必要である。

こうした種村氏の論点に加え、斎藤慎一郎氏が「慶應義塾図書館蔵『論語疏』巻六の文献価値―日本漢学研究資料としての

特色について」と題する報告を行い、以下のように当該本の意義を、異なる側面から、三点にわたって明かにした。

斎藤氏は、慶應義塾図書館蔵『論語疏』巻六（以下、慶應本）を日本漢学研究資料として位置付けた際の特色について、明経道の博士家である清原家に伝えられた『論語義疏』（南北朝）写本（京都大学附属図書館清家文庫蔵）との比較を通して検討した。

第一に、慶應本本文と、清家文庫本『論語義疏』に見られる書き入れとの間にある興味深い符合を紹介した。

例えば、旧鈔本では軒並み「當于時周末」とする子罕篇の疏文は、清家文庫本では「時」字の右下に、他本との校合時に当該字の見出されなかったことを意味する「イ无」の注記を有する。そして、慶應本では該当部の本文を「當于周末」とするのである。

このような例は複数指摘でき、他に、清家文庫本には、「云」字の右下に「去イ」と記した例や、「註」字の右下に「法イ」と記した例がある。実際、慶應本では「去」や「法」に見える字体を備えており、こうした例からは、清家文庫本が、慶應本（或いは字体まで含めて慶應本に近い形を有した本）との校勘

を果たしたらしいことが見て取れると思われる。すると、慶應本（旧鈔本の巻五に相当）にはなく清家文庫本にはある巻に見られる校注も、慶應本同様の古い由緒を有する本文に基づく貴重なものという可能性が示唆されるといえよう。

第二に、中世に於ける慶應本の伝来を考える上で、清家文庫本が書写されたとみられる南北朝期に大学寮周辺で典籍が集散し、近世に至って官務家・局務家といった地下官人のもとして保管されるに至ったと思われる事例を、公益財団法人東洋文庫蔵国宝『春秋経伝集解』を例にとつて述べた。

第三に、篇首の総説のあり様について考察した。慶應本に残された郷党篇首は、旧鈔本にはある篇首の総説を有しない。旧鈔本の中では書写年代の古い清家文庫本にも、子罕篇・郷党篇・衛霊公篇に総説は本文としては見られず、今般の慶應本の出現により、従来は皇侃自作と考えられてきた総説も、その平安鎌倉期に於ける日本人偽作説が今後議論される余地があるう。

以上のように、種村、斎藤両氏の報告からも、さらなる詳細な校勘が、当該本の多様な特色を明かにするための出発点となることが浮かび上がったため、書籍の校勘が書誌学研究の最重要課題であることを確認して、報告の結びとした。

右記の各人による研究報告に続いて共同討議ならびに質疑応答があった。視聴者からの質問としては堀川報告中の「〔宐〕と「肉〕との異同に関して六朝時代の字体の例や中国での漢詩文の用例に基づいた指摘があり、今後検討したい旨の返答がなされた。討議の内容は多岐に亘るが、かつての斯道文庫での集書をめぐる労苦の話から、この度の『論語疏』発見時の印象や『論語疏』に特徴的な文字の字体・書風をめぐる諸問題、旧蔵者である壬生家を中心とした伝来の問題、近世期の考証学者による校勘の営為について、略字使用と奥書・秘伝との関係など様々な議論が交わされ、本フォーラムは終了時刻を迎えた。

四時間半にも及ぶ長時間のイベントであったが、常時一〇〇名前後の視聴者があり、また今回配信に利用したYouTube上において、イベント終了後でも視聴できるよう一ヶ月間の期間限定で配信動画のアーカイブを公開したところ、公開を終了した二〇二〇年十二月二十八日時点までに累計で一五〇〇回以上の再生がなされた。SNS上等でも様々な分野の研究者や一般の方から好意的な反応があり、オンライン会議ツールへの習熟が不十分であったことに起因する小さなトラブルはあったもの

の、概ね成功裡にイベントを開催することができたと考える。

とはいえ、オンライン開催ゆえの功罪両面があり、必ずしもPC操作に明るくはない方や、YouTubeの視聴が困難な国や地域に居住している方などへの対応を十分には行えなかったことも事実である。そうしたいくつかの課題は残るものの、斯道文庫としては初のオンラインイベントとして、「書誌学のこれまでとこれから」について多様な視角から考える機会を今回ことうした形で広く提供できたことは、一定の意義あるものであったと考える。今後も斯道文庫として、オンラインも含めた多様な手段で情報発信を行ってゆく所存であることを述べて、稿を閉じることにする。

（文責 斯道文庫主事 一戸渉）